

新資本主義を考える
(プロジェクト No.2-97)

オックスフォードで考えてきたこと
日本文化は人類の歴史に貢献できる普遍性があるのか

池野 健一氏述

新資本主義研究会

目次

はじめに	1
------------	---

I オックスフォードで考えてきたこと；

日本文化は人類の歴史に貢献できる普遍性があるのか

池野 健一氏述

1. はじめに	2
2. CIE Oxford 校のプログラム	2
3. Oxford で考えてきたこと	3
4. Oxford 大学とアメリカとの関係	5
5. 日本文化は人類の歴史に貢献できる普遍性があるのか	6

II 質疑応答	10
---------------	----

2009. 3. 13

[この資料は会員間の研究のためだけに作成されたものです。]

はじめに

UTS 国際教育センター代表取締役の池野健一氏は、1974 年に英国に学校を設立し、現在も CIE Oxford 校（英国のオックスフォード市内にある私立カレッジで、在籍学生は 30 ヶ国以上の国際的な学校）の運営を行っておられる学校経営者です。同校は、日本の大学・高校に対して、オックスフォード大学の施設、人材を活用したオックスフォード大学での研修プログラムを実施してこられました。

3 月例会では、池野氏より、仕事を通して浮かび上がってきた 30 数年のご経験を踏まえ、「オックスフォードで考えてきたこと；日本文化は人類の歴史に貢献できる普遍性があるのか」というテーマでお話いただきました。

日本人の英語力、英国人の日本人観、英米の結びつきの深さ、オックスフォード大学の世間的な名声と真理探究の場としての実像等に触れられた後、日本文化は人類の歴史に貢献できる普遍性があること、さらに日本は今すぐにも人材育成をやるべきとのご提言をいただきました。

I オックスフォードで考えてきたこと；

日本文化は人類の歴史に貢献できる普遍性があるのか

池野 健一氏述

1. はじめに

本日の会合の主旨がよくわからずに、こちらのメンバーである綿貫先生からのご依頼を受けて簡単にお引き受けしてしまいましたところ、代表世話人の多島様が打合せにお見えになられました。お話を伺っておりますと、伊東光晴先生が有力会員である研究会と伺いまして、心臓が止まる思いがいたしました。と申しますのは、私は法政大学で伊東光晴ゼミにいました時に今の仕事を創業しまして、それから 38 年間、ずっとやっております。現在は日本の大学にとって国際戦略上、交流すると有益と思われるのはイギリスのオックスフォード大学ではないかと思っております。オックスフォード大学に日本の大学を紹介したり、オックスフォード大学と一緒に魅力的な海外プログラムを日本の大学のためにつくるということをしております。伊東光晴ゼミに在籍中は決して褒められた学生ではなかったと自負しております。今日は伊東先生の前で話すということは大変なプレッシャーでございまして、本当は、後でお断りしようかと思ったぐらいです。

現在は仕事の関係で東大、京大、一橋大学をはじめ、色々な大学を回っておりますが、明らかに日本の大学は危機に入っているのではないかと思っております。これを皆様方に提言すると同時に、私自身が 1974 年に現地法人、今の CIE Oxford 校をつくる中で、オックスフォード大学の方々と色々対話をしてまいりました。その中で、日本の文化、特に今は中国が非常に強く世界に存在感をアピールしておりますので、日本の文化とは一体何なのかとか、日本文化に普遍性はあるのかとか、英国人との対話の中で感じたことを少しお話しさせていただきたいと存じます。

これを学問研究のテーマとしますと大変なテーマですので、単純に私の個人的な体験を基にした雑感・所感であるをご理解いただきたいと思います。

具体的にオックスフォードでどのようなことをやっているのかというイメージはなかなかかわかないと思いますので、私共が法政大学法学部とやっております割合大きなプログラムである HOP (Hosei Oxford Programme) の解説を少しご覧いただきまして、次にレジюмеを基にお話しさせていただきたいと思います。

2. CIE Oxford 校のプログラム

(法政大学とのプログラム (HOP) の映像)

このようなプログラムを何年間かやってまいりました。

3. Oxford で考えてきたこと

今、ご覧いただきましたように、私が実際に経営しております学校は国際的な学校でして、30 カ国以上の国の学生が勉強しております。ただ、オーナーの私はイギリス人の教員やスタッフを使って日本人向けに特別のプログラムをつくることのできる特権を与えられております。30 年間かかってつくった体制を日本の学校のために使いたいということで経営しております。

最初に、これからの時代は英語を使って実際に自分の意見とか、日本という国について発信できる人をつくっていかないと、もう間に合わない時代に入っていると強く感じています。それは、世界に通用する指導者をどういう風に日本はつくっていったらいいのだろうかということにもなります。今の学生は、放っておくと出不精で、海外に出て行かない、安全な日本にいたいという学生が増えております。日本の学生たちに、世界は、そんな引きこもり現象ではやっていけないということを理解してもらうためには、やはり世界に出てもらうしかないと思っています。福沢諭吉が英国のパブリックスクールに範をとって慶応義塾大学の経営を始めたことを見てもわかりますように、日本の近代化に英国が果たした役割は大変大きいものでして、教育においてもそうだと思います。

現在、オックスフォード大学の学部学生の半分はハローやイトンのようなパブリックスクールの出身者です。パブリックスクールというのは全英で2千校ある私立校の中でトップの2百校を指します。私立校の学生は全体の青年人口の数パーセントしかおりませんが、オックスフォード・ケンブリッジに入ってくる学生たちの半分は、私立校出身者が占めるのです。それはなぜかと言うと、オックス・ブリッジは、ただ成績の良い学生を採るのではなくて、人格の優れている学生を採りたいという気持ちが強い大学だからです。パブリックスクールには、18 歳になった時に、世界のどこに出ても恥ずかしくない学生を養成するという基本理念があります。福沢諭吉の「気品ある紳士淑女をつくる」という慶応義塾の目標と、かなり一致するところがあると思っています。英国にも負の部分がありますが、まだまだ英国に学ぶ部分は多いのかなと思います。今の日本の教育体系の中で、18 才でそのような体制がつけれるという学校がどれだけあるかと思うのです。

最近、感じていることは、学生は良いものを与えれば伸びるということです。2005 年に法政大学と HOP を実施しました時に、プレゼンテーションの最後の日に、「このユニバーシティカレッジで僅か2週間学んだことで、人生観が変わった。この経験を基に、外交官を目指したいし、ゆくゆくは総理大臣になりたい」という発言が、大学に入りたての一年生の学生から出ました。こういうレベルの高い場で教育すると、若者はぐっと伸びていくということを感じております。

また、最近感じておりますのは、世界の中で BRICs と言われる新興国の台頭もあり、日本の地位がかなり低下しているのではないかということです。欧米中心の世界の中でアジア

で指導的地位を果たしてきた日本という国に対して、もはや昔のように敬意が払われない時代に入っているのではないかということです。日本は‘One of the major countries’ という思いで、国際的な場に日本人が出てははっきりと、もはや major ではないのではないかという態度に出られまして、ちょっとカルチャーショックを受けております。国際社会で発信しないことに原因があるのではと思っております。例えば、日本に対して海外でとんでもない評論が出ておりまして、今までは割りと黙っておりました。これではいけないのではないか、正すべきところは正さなければいけないのではないか、世界の方々との対話を行い、日本という国はもっと主体的に国際的な場に係わっていかないと日本の存在意義がなくなっていくのではないかと感じております。

昨年、ベルリンで学校経営者と話した時に、北朝鮮の拉致問題についての話になりまして、面白い質問を受けました。「日本は北朝鮮の拉致問題の解決を世界に呼びかけている。それは当然のことだと思っていた。日本は戦後、一切戦力を持たないと言っているから、世界の世論に訴えているのだとばかり思っていた。最近ある本を読んでいると、日本は世界で5番目に入るくらいの軍事強国であると知り、非常に驚いた。そんなに軍事力を持っていて、どうして邦人が人質に取られて、なぜ助けに行かないのか。簡単なことではないか」と言われました。「国としての独立の気概」とでも言うのでしょうか、福沢諭吉が言った課題がいまだに解決されていないのではないかと感じております。

その延長線で言うと、「グローバル 30」とか、「ようこそ日本」というキャンペーンが大変に盛んです。「グローバル 30」というのは、今は海外の大学から日本の大学に勉強に来ている留学生が12万人くらいですが、あと10年ぐらいでこれを30万人くらいに増やそうという計画です。福田康夫総理の時に提唱した話ですが、ビジョンとして、こんなに魅力的な国だからいっちゃいという議論がいまだに出てこないのです。考えてみますと、アカデミーフランセーズができた一つの起りは、「世界語であるフランス語の正統的な教育を、明快なカリキュラムを作り、文法を明快にして、美しいフランス語を勉強しましょう」という具合に、国家戦略があったと思うのです。ところが、「日本語教育はこうだ」というようなものは、いまだに出てきていません。各大学が個別にやっている状況です。このように、はっきりとした国語および日本文化定義がまだ打ち出せないでいます。そうこうしているうちに、世界の大国である中国が出てきておりまして、国際的な地位で中国にどんどん遅れをとっている状態です。日頃、国際的な会合に出ておりまして、強く感じております。

年間海外渡航者の中で年齢別に調べて見ますと20~24歳は119万人、25~29歳は163万人と、ずっと100万人台なのですが、15~19歳は52万人しかいないのです。高校生、大学初年度の時に海外に出ないのです。ヨーロッパですと、世界語の英語を学ぶのは高校生なのです。今、スペイン政府は何百億円という国家予算を使い、高校時代に3週間から4週間くらい海外で英語を学ぶことを奨励しています。次にはフランスがそれをやるということで、オックスフォードの私共の学校もそういう学生を当て込んで営業活動をやっています。

それくらい世界がどんどん動いている中で、海外に学生を送ると危機管理や安全対策が心配だと思っている先生方が多いようなので、高校時代に海外に出る学生数は極端に少ないのです。

4. Oxford 大学とアメリカとの関係

オックスフォード大学を見ますと、学生数 19,933 人に対して、教員が 4,000 人おります。生徒 5 人に対して先生が 1 人いるのです。非常に贅沢です。学部の 1 年生の時から、個人レッスンで先生から指導を受けるというチュートリアル制度をいまだにやっています。面白いことには、アメリカ人の学生が非常に多く、1,413 名おります。二番目がドイツで、毎年 600~800 名くらいです。圧倒的にアメリカが多く、またその学生の多くはアメリカのトップレベルのアイビーリーグ大学の出身者です。日本では日米関係、日英関係と言っておりますが、英米関係の深さ、特にオックスフォード大学でのアメリカの大学との結びつきの深さを非常に強く感じております。

1980 年代にアメリカのダートマス大学というアイビーリーグ大学と仕事をしていた時がありまして、先生方と話をしておりますと、アイビーリーグ大学の教員はオックスフォード大学で修行していることが当たり前でした。歴史的に言えることは、英国 18 世紀のジョージ王朝時代は、その前の世紀にチャールズ I 世がオックスフォードに立てこもってクロムウェルと戦争をして首を切られましたが、そういう残酷なことをした反動として、比較的穏やかでした。その中でも政治的に一番先鋭的な人たちがつくったのがアメリカ合衆国なのです。アメリカの歴史を調べますと、英国 18 世紀のジョージ王朝の時代に遡ります。アメリカの法律学者に言わせると、文献は全部イギリスにあるのだそうです。ですから、アメリカの法律を専攻する人は、イギリスに行ってお勉強しなければ一人前とは言えないそうです。文献を調べる図書館は、British Museum の British Library、オックスフォード大学図書館のボードリアン・ライブラリー (Bodleian Library) ということになっておりまして、ここでリサーチワークする人が大変多いわけです。

次に、オックスフォード大学で英米関係を象徴するのが、ローズ奨学金です。セシル・ローズという、今のジンバブエの国をつくった方が提唱した奨学金制度です。帝国主義者として評判の悪い人でしたが、その方が唯一良いことをしたのは、財産を残して世界中のトップのエリートたちを 2 年間オックスフォード大学に留学させる制度をつくったことだといわれています。そこで選ばれた留学生で、古い方ではフルブライトさんがいらっしゃいます。彼は、オックスフォード大学のペンブロックカレッジで 2 年学んだ経験を基にして、フルブライト奨学金制度をつくりました。最近では、クリントン元大統領が学びました。このローズスカラー (奨学生) にまつわる話は多くありまして、カーター大統領は、実はローズスカラーの試験に落ちています。彼のホワイトハウスメンバーが全員ローズスカラーだったため、初顔合わせのとき最後は「私が君たちを使っている」と強弁したという話が残っています。

『クロニクル オブ ハイヤー エデュケーション』というアメリカの大学情報を伝える週刊誌がありますが、そこで田舎の名もない大学からローズスカラーが1人出たということで地域が大騒ぎをしたという記事が出るくらいです。通常は、ハーバードやエールというアイビーリーグの学生が選ばれる確率が非常に高いです。

5. 日本文化は人類の歴史に貢献できる普遍性があるのか

日本という国の実体というか、実像というものが、英国人と話していて、彼らに非常にわかりづらいということを感じております。最近、中国が注目を浴びておりますために、かなりの西洋のメディア関係やビジネス関係の方々が日本、中国、韓国に行っています。いってみても彼らの経験ですが、中国と朝鮮はメンタリティーも非常に似ている。日本人は彼らと顔かたちは同じようなのに、メンタリティーは全く違うと言います。それはなぜなのかという意見が、やっと出てくるようになりました。

これらが、日本が依って立つところの一つの方向性なのかと思っております。私が彼らに説明することは、「文字の文化は『古事記』、『日本書紀』から始まると言われていますが、僅か千五百～千六百年前のことです。今、発掘されています縄文土器は、一番古いものと1万5千年前のものです。文化人類学では土器の発明が文明の始まりとしておりますので、日本が世界最古の文明になるわけです。1万5千年続いた日本文化の流れの中で、僅か千五百年間は朝鮮や中国の影響を受けた時代があったと考えると、その前の1万数千年に亘って日本列島の中で築かれたDNAが日本人の原型ではないのか」と思うわけです。そういう事実を知っている方は殆どおられませんので、なるほどという話になるのです。

英国人と話していると、ユーラシア大陸から見ると日本は **Far East** だけれども、私たちがあなた方を見ると英国は **Far West** で、同じ島国だと。そこから対話を始めて、次に日本の文字のある千五百年の歴史を振り返ってみて、どういう風に日本の歴史というか、民族というか、文化が変遷していったのかということ、彼らの歴史の流れと照らし合わせながら議論していくことが、割りと友好的な対話ではないかと感じています。

これは伊東先生の受け売りなのですが、丁度、伊東先生のゼミに出ていた時に、京都大学の中国文学の大家である吉川幸次郎先生の話が出ました。岩波で吉川先生の本が話題になっておまして、そこで交わされた話で非常に印象に残ったのが書誌学の話です。日本の儒教の研究で発展したものが書誌学です。日本の近代化は、よく明治維新の時から始まったと言われますが、それは少し違うと思っております。実は18世紀から始まっているというのが私のスタンスです。18世紀と言いますと、初め頃には忠臣蔵があった元禄時代です。そこから約百年間は戦争がなかったため、人々が豊かになっていくのと比例して町人文化が成熟していくわけです。その中で出てきたのが、商人といえども一つの道があるのだということを説いた石門心学です。これは非常に独創的なものだと思います。その後、農業関係で言いますと、二宮尊徳のような大変面白い人が出ました。尊徳は一種の実践的な哲学者ではないか

と思っています。

もう一つ、非常に面白いと思いましたが、儒教の文献研究です。それまでの朝鮮や中国の人は、儒教の文献は全部、聖人の教えだということで、全部ありがたく押し頂いていて、全く疑問を差し挟んでいませんでした。それに対して、日本人は、「これは新しく後に付け加えたのではないか」とか、「これはオリジナルではないか」とか、整理を始めたのです。そして一つの定本、英語では **Text Critic** と言いますか、そういう形で整理し始めたのです。本当の聖人が説いたのはこういうことだったのではないか、ということを示したのです。幕末の頃に、そういうことを研究したものは日本にしかなかったもので、幕末の日本が中国に輸出する最大の品目の一つが、そういう注釈本になっていくわけです。理性的に物事を考えて、一つの独創的な体系を打ち立てるということが、日本人の独創性と言ってもいいのではないかと思っています。

そこで、18 世紀の話をする、西洋社会においてはアメリカの独立とフランス革命という大変大きな時代の動きがありました。その前提になっているのが、百科全書派であり啓蒙思想の時代なのです。英国は 18 世紀のジョージ王朝時代に、それを原動力にしましてアメリカの独立があり、19 世紀にビクトリア王朝時代というイギリスの絶頂期を迎えていくわけです。この歴史的展開に対して、日本の場合は、残念ながら東の端で閉ざされた部分があったものですから、イギリスのように世界に飛躍していくことはありませんでした。ある意味でビクトリア王朝時代というのは、イギリスのスタンダードが世界のスタンダードになっていく過程でもあるのですが、日本はそこまではつくれずに、急速な西洋化という摂取の問題という形で国を発展させて、百年かかって世界的にメジャーな経済大国になっていくわけです。HOP(法政大学オックスフォード大学プログラム)を実施した時に、イギリスの歴史学者の先生を招いて授業をやりました。その先生は少し強弁的なところがありましたが、「皆イギリスのインペリアルイズムと言うけれども、イギリス人は世界の地域で搾取しようとは思っていなかった。世界に飛躍して、色々なところでイギリスと同じような市民社会ができればいいなと思い、そこに定住する時に、イギリスと同じような法体系や社会をつくりたいと思って、イギリスのものを海外に持っていったのです。それを、後の人がインペリアルイズムと言っているだけの話で、我々としては、非常に階級闘争的に言われることは残念である」という話をされました。そういう風に自己を正当化するという考え方もあるのかと思ったわけです。

日本の文化に普遍性があるのかということは、ある意味で英国人との対話をベースにして議論することになります。イギリス人は自分たちが、正確には英米の歴史が世界の歴史のように思っていますので、それに対して、「日本には独自の歴史的展開や体系がある」と言った時に、どうやって議論するのかというと、やはりイギリスの歴史をよく理解しておいて、「君たちの歴史ではこうだった時代に、我々の歴史はこうだった」と言うしかないのです。そういうことを何度もやってきております。

一つ最近感じていることですが、日本の場合は文字による文献に基づく歴史研究にこだわり過ぎていてのではないかと思うのです。具体的に言いますと、イギリス人は、ケルト人の文化を重視しております。ケルト人は文字を持ちませんでした。アングロサクソンの前から、何千年も居座っていた民族です。その民族がアングロサクソンの侵略の中で、隅のほうへ追いやられて、ウェールズやスコットランドやアイルランドに居るわけです。この人たちをノスタルジーとして、18世紀から19世紀にかけて英国社会の中で、滅んだ民族としてのケルト人を非常に懐かしむ気風が出てまいりまして、それがアーサー王伝説と結びついていくわけです。それは文学の話になりますが、考古学的に言いますと、文字を持たなかったケルト人はどういう倫理観を持ち、どういう社会を築いていたのかということが、英国では大変大きな関心事になりました。ある意味で、アングロサクソンが滅ぼしてしまった人たちに対しての後悔の念ということの表現かもしれません。その人たちも英国の中で一時期強勢を誇ったという意味で、英国の歴史は、英国という土地を舞台にして、ケルト、ローマ、アングロサクソン、デーン（昔、元気のよかったバイキング、今のデンマーク人）、ノルマン、こういった人たちが色々な独自の文化を展開してきましたが、それがトータルでイギリスですよ、という考え方なのです。

日本の場合は、そういう意味で彼らと比較すると、単一民族ということにこだわり過ぎるのではないか。元々はアイヌが縄文文化人の有力派の一つであったという説もありますし、北のシベリアのほうから南下してきた人たちも日本人の原型の一つだったはずなのです。そういう議論がどうもなく、天皇を戴く一つの国ということになっております。文献的にわかってくるのは千五百年くらい前からですから、それに対して、もっと時代を遡り、色々な雑多な人たちが集まってきて一つの日本という国がつけられたから雑種民族なので強いのだよ、という議論をしていってもいいのではないかと思うのです。

現在、オックスフォード大学の学部の日本人留学生は20人くらいです。それに対して、ここ数年で中国人の留学生は200人以上になっています。オックスフォード大学の方々と話をしておりますと、「なぜ日本人は留学に来ないのか」と、逆に聞かれます。皆様ご承知のように、セントアントニーズカレッジというのがオックスフォード大学での日本研究の中心ですが、ここには日産が寄附をしました日本研究センター(ニッサンインスティテュート)があります。これがオックスフォード大学の日本研究のメッカということになっているのですが、いかんせんセントアントニーズカレッジは創立が1953年で、大学院カレッジなのです。学部の学生を養成しているではありません。オックスフォード大学で有力なカレッジというのは、学部教育を3年間、個人レッスンを通して徹底的にしごくというのが伝統です。学期中にオックスフォードに行きますと、チュートリアルという個人レッスンを受ける学生たちがガウンを着ている光景が見られます。先生のところにガウンをつけて行って、先生に敬意を表して個人指導を受けるという伝統がいまだに続いています。そこで培われた学部教育がオックスフォード大学のエッセンスなのです。それに対して大学院のほうは、世界

の研究大学としての実力を維持するところとしてはっきり分かれています。セントアントニーカレッジの場合に私が問題だと思っていますことは、研究する大学院の人たちばかりなのです。彼らは、2～3年くらいリサーチワークをしたら、また帰ってしまうのです。そういう人たちの出入りを30数年間見ておきますと、結果的にオックスフォード大学に日本としての連続したポリシーというものがつくられていません。

例えば、オックスフォード大学から見ればスタンフォード大学は非常に新しい大学です。創立百年くらいしか経っていないため、オックスフォード大学の中にイギリス研究センターをつくりたかったのですが、大学当局から30年間却下され続けました。新参者の大学に何でオックスフォードが場所を提供しなければならないのかという形で、アメリカの名門校といえどもそういう扱いを受けるのです。ある意味では頑固であり、ある意味ではアメリカと違った価値体系の教育を千年近くに亘ってやってきた大学なのです。オックスフォード大学を日本の大学で研究する先生方や学生たちに直接接触してもらい、触媒作用として、我々ももう少し足元を見直して、より良い大学教育、国際化教育というものができないかと思っております、そのため30数年やってまいりました。

これからは質疑応答に移らせていただきたいと思います。

(小松祐子記)

II 質疑応答

嶋口：池野さん、ありがとうございました。大変興味深いお話でございました。早速、これからフリーディスカッションの形で、池野さんにお尋ねしたり、ご意見をいただいたりしたいと思います。ご意見なりご質問がございましたら、ご自由にどうぞ。

折角の機会ですから、恩師の伊東先生のほうから一言お願いいたします。

伊東：細かいことですが、江戸時代に「文献学的、書誌学的」とありましたが、確かにその通りです。その伝統は今も日本に息づいています。例えば、ケインズ研究をとると、ケインズの『一般理論』の草稿は三つあり、何年何月何日にどう考えが変わったか等々、微に入り細にわたっています。ハロッドの“ケインズ伝”に使った全ての資料は日本にあります。

池野：一橋大学ではなかったですか。

伊東：千葉商科大学です。日本が、雑種文化であることは確かです。外から来る文化が幾重にも重なっています。仏教が来る以前に神道があった。その神道も道教の亜種で、神道以前の宗教があり、その全てを受け入れている。そこで、ヨーロッパ人から見ると、日本には宗教がないというのではないですか、となる。ヨーロッパは…。

池野：一神教ですね。

伊東：それに反し日本はあらゆるものに神が宿るといふ、アニミズムに近いといふのでしょうか。

法律については、アメリカは、当初ドイツの影響があります。アメリカの 19 世紀の学者の留学先は、ドイツです。イギリスではないのです。にもかかわらず、今日のお話のように、ドイツの影響はなくなるのです。そうしてイギリスになる。なぜか私にはわかりません。それと、ヨーロッパはイギリスではない、イギリスはヨーロッパではないと、よく言われます。日本も大陸と異なる。日本の文化の特徴は何かといふと、非常に困りますね。何でしょうか。

池野：修験道は、どういう風に思われますか。スタンフォード大学で日本研究をしている人と話した時に、「これこそ、古神道の流れをくむのではないか」と。あれは、密教の修行だと言っているが、完全に神道ではないかという指摘でした。

伊東：神道の来る前に、日本の本来の宗教はあったのです。お通夜の習慣も古代宗教です。仏教にはない。神道にもない。神道は外来思想で、日本思想ではありません。修験道と天皇家の結びつきは、綱野史学が強調するところでしょうか。ただ、日本は世界でたった一つ古代国家が生き続けている国です。天皇家は古代からのものです。古代国家は擬似家族主義です。天皇制の力が強いのは、家族主義だからです。古代国家が今まで生き続けているのは日本だけです。もちろん、フランスにもドイツにもイギリスにもありません。イギリスの王

政は中世からのものです。アラブの王政は、三代前からでしょうか。古代国家が生きているのは、世界で日本だけです。これが文化なのですかね。

池野：私の勝手な想像なのですが、よく西日本の歴史学者の方とお話すると、90%以上の西日本の歴史学者の中では、天皇は南朝鮮から来た王族の子孫であるということが、確定しているみたいです。

伊東：そうらしいですね。

池野：その前はどうかということ、そのあたりは、イングランドの歴史と似ていて、「俺が英国の国王」と宣言した者が勝ちみたいところがあって、そういう意味で、国のトップという意識がなかった縄文人の中で、南から来た人が「私が実は皆が信仰している宗教のトップなのですよ」と言って、鉄器も色々な兵器も持ち込んで、「私が皆を率いる」と言ったのが、天皇制のおこりなのかな、と勝手に思っております。それより一万年以上前に形成された日本人という意識もなかったと思いますが、日本人には国の意識もなかったですから、そこで漠然とした、山に神が宿るという形で手を合わせるとか、ご先祖様に手を合わせるとか、素朴な原始的な宗教を大切に、その価値観をずっと持ち続けてきた民族なのかなと思っております。日本はこれだけ経済大国になりましたが、G7、G20 という中で、一神教でない国は日本だけなのです。宗教の多様性を認め、社会の多様性を認めても、世界の強国になれるという証明を日本はしているのではないかと、勝手に思っています。

伊東：そのとおりでしょう。

フランス人から見れば、アメリカもイギリスも近代国家ではないかもしれません。宗教と政治が分離されていない。フランス革命は完全に宗教からの政治の独立ですから。これはフランス憲法に書いてあるとおりです。フランスの義務教育課程にアラブから来た子供がいても、一切公的教育機関においては宗教色を入れてはいけません。ヴェール禁止です。共和国憲法というのはそういうものなのです。それに対して、アメリカがヴェール禁止は民主主義に反すると言う時、フランス人はあざ笑ったのです。大統領が就任式の時にバイブルに手を添えるのは、近代国家ではありません。また、日本人には宗教が事実上ないと言うのです。近代国家は、フランスと、あとは日本でないかというくらい、日本人の中に宗教は本当は生きていません。日本の文化の特徴でしょうか。

大井：中央大学の大井でございます。幾つか教えていただきたいことがあるのですが、一番大きなものは、今日のお話を拝聴しますと、私には、どうもイギリスはエリート教育に成功した国ではなかろうかと思われま。それに対して、日本にはエリート教育というのはないですね。東大の学生の半分以上は地方から出てきた庶民の息子です。高校までエリート教育を受けてきたのではなく、極めて平均的な一般的な教育を受けた中から最後にトップエリートが出てきているのが日本だろうと思えます。ある意味では、大変困った現象という意見もあると思えますが、私はそうは思いません。それは日本の一つの方法ではな

いか。それ程イギリスがいいのであれば、日本も小学校からエリート教育をやったらどうだということになりましょうか。例えば英語をやると言っても、小学生全員に英語をやらせることもない、エリートがやればいいと。今まで日本がやってきたことは底上げ方式で、その中からのし上がる者が当然出てくるというのが日本の文化だろうと私は思うのですが、如何なものでしょうか。

文化についても同じです。いま私も西欧の音楽・絵画が大好きで、外国に行く度にそれを楽しんでいるのですが、これらは王様とか貴族が保護してつくり上げたものです。日本の場合には、そうでない文化、例えば浮世絵は江戸の庶民の中から出たもので、あれはエリート文化でも何でもない。それでも素晴らしいものをつくるのが日本ではないか。日本ではどちらが本命で、今後やっていくのがよろしいのか、お教えてください。

池野：エリート教育というと、確かにそういうレッテルの貼り方があると思いますが、実はそういうのを言い換えて、個を磨く場をどこまで日本の教育が提供しているのかなと、考えたほうがわかりやすいと思っております。例えば、東大生は半分くらいが地方の貧しいところの出身とおっしゃいましたが、今は親の年収が非常に高く、これは東大も京大も同じ現象ですが、小さい時からの受験勉強に長けた子しか入れない、しかもその親は高額所得者でこれが半分以上を占める。恐らく、日本の大学で最も親の高額所得者層の割合が高いのは東大だろうという時代に入っているわけです。それは、社会的な問題として色々な議論があるかと思いますが、一番問題なのは、そういう議論をしている中で、日本という国が世界の注目を浴びていることです。先日、中川さんが醜態をさらけ出してきましたが、私の目から見ると、中川さんが醜態をさらけ出したのがなぜみっともなかったかということ、エリートというか、社会のリーダーは、そういうことをしてはいけないということを徹底的に向こうの子はしごかれるのです。そういうことに無縁のままに一生を終える人もたくさんいるわけです。日本の場合は一つ社会が弱くなったのは、そういう現象だったら皆それでいいではないかと思ってしまうところが、世界の中での活力を欠く日本になっているのかなと私は思っております。今、省庁の中でも外務省が外国語に長けている人が多いのです。外務省の人以外は英語が話せないという時代ではありません。経産省の人であれ、財務省の人であれ、日本の経済政策はこうですよと世界に向かって発信できなかったら、例えば、海外のプレスの人からマイクを突きつけられた時に、我が国の政府、省はこう考えていると言えなかったらその段階で次の方が控えているわけですから、日本の出番はおしまいになってしまいます。それがここ 20~30 年続いてきたのかな、と思えます。言い換ええますと、議論のできる人です。それを何とかつくりたい。それでなぜオックスフォードかと言いますと、テクニクに長けた人を養成すればいいのかなという議論に、日本の場合にはどうしてもなってしまいます。

私がオックスフォードに行って非常に感激したのは、中世の伝統が生きている大学なのだということです。中世の伝統とは、オックスフォードで真理を究めたいという形で、ス

コラ哲学の研究では、ソルボンヌと並んでオックスフォードがヨーロッパのリーダーの学校の一つだったのです。その時にはイギリスというような意識はないわけです。イギリスの中のオックスフォード大学などは考えていなかったのです。「あそこに行くと、凄い先生がいて、もう少し真理に手の届くような研究ができるから、あそこに行こう」ということで、それがたまたまオックスフォードという名前と呼ばれていただけなのです。真理を学ぶ探求の場としての大学という伝統を営々と守ってきているのです。私が最初にオックスフォードで研修を始めた時に、凄いカルチャーショックを覚えたのはそこでした。アメリカ人の大学院生と話した時に、ある自分の研究仲間が研究に行き詰って自殺したということです。私もあの頃はオックスフォード大学の本質が良くわかっていなかったのです。そこでやっと、そうだなと思ったわけです。ある一時期、オックスフォード大学のカレッジに属して、そこで徹底的にお金も社会的身分も全く関係ない、全部取っ払って、それでとことん真理探求の場で何かを究める、一種の修行僧的な教育をやっているわけです。あの頃は労働党政権でしたから、貧しい人でもかなり国、地方自治体がお金を出してオックスフォード、ケンブリッジに入れていました。片一方では貴族の出のような人もいました。カレッジの塀の中に入りますと皆平等です。学問を究めて、独創的な考え、世界をリードするような考えを出せた者が偉いということで、これが徹底的に貫かれていました。日本の大学でそれに近いのは京都大学だと思っています。比較的そのような気風が強いです。アメリカ的なトップ大学・エリート大学の名前にとらわれない、オックスフォードの価値を私は見出しています。明治の初めの大学令の中で、森有礼がつくったと思いますが、国家に須要なる者を養成すると言っているのです。日本国のためになることを大学はやれ、と。しかし、その前からあるオックスフォード大学は真理探究の場です。学問をしたい者は来なさいということを千年に亘ってやっている、これが本当の大学の伝統だということを学ぶ意味でも、非常に価値があるのではないかと思います、私は、やっています。

伊東：日本の特徴は比較的平等社会です。オックスフォード大学は、エリートとは無縁な理工系を持たない。

池野：ありますが、弱いですね。

伊東：伝統的には文科系です。それが欠点になっている。19世紀アメリカは、大学教育において、逆立ちしてもヨーロッパ、イギリスにかなわなかったのです。そこで、20世紀に大学院教育に切り換えたのです。これが大学の大量化の中で成功した。イギリスには大学院教育はなかった。

先ほどのお話で非常に重要なことは、オックスフォードも、ケンブリッジも学部教育です。この伝統を日本で継いでいたのは、東大法学部かもしれません。東大の法学部で大学院に行った者は、二流です。一流は、学部からすぐ助手になる。ケンブリッジもオックスフォードも伝統的にそうです。その他の大学はそういう教育をしていないのです。これが、日本人にあまり理解されていないことですが、果たして日本はそれでいいのかどうかの間

題を含めて、ご意見があったらお願いします。

綿貫：フランスはその中間です。グランゼコールも大学院教育中心です。成人はエナに行きますし、理工系に強いのはポリテクニクです。歴代の首相とか、建築、企業、政治で活躍している人が出ています。それとユニバーシティです。はっきり分かれています。エリートはグランゼコールに行き、一般の人はユニバーシティです。これは端的な分け方ですが。

今のお話は大変興味深く伺いました。イギリス、アメリカ、フランス、それぞれがあり、日本は、私が思うには、ドメスティックな社会では、中流階級を中心としたエリート中心のシステムでいいと思いますが、これからの国際社会では、エリートと一般という分け方がどうしても必要ではないかと思えます。国をリードする人、フォローする人、それをアシストする人です。その中に機会があったとしても、二重構造が必要になるのではないかと私は思います。

館野：専門性がないところから、質問をさせていただきます。

今日の一つの題の「普遍性」ということを、もう少し世界の人たちとシェアできれば、我々はかなり高い評価をいただけるのではないかとずっと思ってまいりました。自然科学の領域では、相当、普遍性をシェアできるのではないかと感じております。もう少し庶民的に考えますと、先ほど、伊東先生が触れられた「神が個を定義する」世界と、多神教でも一神教でもとにかくといたしまして、ここにいらっしゃる皆様、即ち「汝・貴殿」が館野浩一を定義するような社会の違いが一番、元があり、日本には宗教的なものとして祈りはあったのかもしれませんが、世界の人たちから見ると、無宗教です。私は、神社の氏子総代をしており、父の葬式はお寺さんと父が懇意にしていたので仏式でしたし、結婚式は大学の教会でキリスト教でしたし、典型的な無宗教です。ここで講演をされた東大の法学部のフット教授が日本の裁判員制度とアメリカの裁判員制度は、一言で言うと、日本では全員一致が前提になっているが、アメリカでは、裁判官が違ったら答えが違うのは当たり前の世界である、とおっしゃっています。「水に流す」とか、あるいは法律の制度の中に、天皇制とか法制度が皆同じで普遍性がなければならないという私たちの知恵があるのかなという風に、庶民的に感じております。何かコメントをいただければ、と思えます。

池野：“We have no religion”は日本人の専売特許のようなもので、海外の人にすぐ言いますが、日本ほど宗教心に厚い国民はないと私は思っております。例えば、向こうの人の感覚では、“We have no religion”と言ったら、道德性が何もないから人のものはすぐ取ってしまえとか野獣同然の人間に墮落するという感覚で、だから宗教は必要なのだ、という考え方です。日本の場合の秩序正しい生活など、道德性が高く、宗教性が高くない限り、こんな生活は営めないわけです。文字のない縄文時代を見ても、皆平穏無事に死んでいって、殺し合った骨が出土していません。唯一例外が、弥生時代に入り、中国や朝鮮から人が来た時にどうも殺し合ったようですが、それ以外はないのです。有名な話ですが、源氏物語

ができた平安時代は、死刑が一回も行われなくて時代が終わっているといった具合に平穏無事な社会なのです。これは非常に大変なことで、このようなことを取っても日本ほど宗教心に厚い国はない。これはどこから来たのか、色々な異民族が縄文時代にはいたと思いますが、その人たちが殺し合わずに仲良くやっていた時代が何千年も続いていたという時代があったからこそ今の日本がある、ということしか説明の仕様がなと思っています。

伊東：本居宣長は、宗教ではなくて、日本はきれいか、汚いか、これがヨーロッパの宗教心に代わるものだと言っています。汚いというのは、日本人にとって、最大の侮辱だと言うのです。

館野：先ほど「高み」という言葉がございました。今日は「高み」のお話を伺いたかったと思いますが、彼岸的なものが「高み」であれば、宗教心からではなく、建築でも音楽でも、「高み」に近づくと宗教的な信仰的なものが非常に近づいてくるという意味でおっしゃられたのかどうかを、勉強してから、また質問させていただきたいと思います。

梅原：私はたまたまオックス・ブリッジに反対してつくられた LSE で勉強していましたので、基本的に違う感覚が残っているのは、仕様のないことです。まず一つは、エリート教育に関して、エリートとして選ばれた人の反対側にある人たちがちゃんとした市民生活ができることが、イギリスの素晴らしさなのです。今はイギリスも変わってきましたが、1969 年くらいに私はいまして、たまたま日本が安保の世代でしたから、向こうに行っても、ヤンキーゴーホーム、戦う連中をサポートしてやっていたんですが、エリート教育という言葉を考える場合に、その反対側に何かがあるかを見すえなければ駄目ではないだろうかということが第一点です。

第二点に、私は 35 年ばかり、海外で仕事をしてきましたが、世界の普遍性ということ考えた場合に、普遍性の反対側には独自性があります。閉ざされた日本の江戸時代で、開かれていない江戸時代の文化が、どれだけ普遍性を持っているかと言うと、非常に疑問です。日本の宗教は、私はたまたま都市計画をやっていたから、いいもの、本物をつくるということが、美と結びつくという形は、非常に賛成です。これについて如何でしょう。

池野：エリート教育の反対側には何かあるかということですか。

梅原：反対側にある人たちが、ブッチャーはブッチャーとして十分市民権を持って生活できる社会体制があるわけです。

池野：去年からバブルが崩壊していますが、イギリス社会は、昔は、英国人と話すと、この人はパブリックスクールアクセントだから、きっと、パブリックスクールからオックス・ブリッジを出ているなとぴんと来るのです。ロンドン大学ですら、3代続いているとか、オックスフォードだったら4代、5代続いていることなど当たり前の社会であったわけです。パブリックスクールに行くことを希望するのは、昔は中産階級だけだったわけです。これが十数年の景気の好転の中で、労働者階級の子も行くようになっておりま

す。私共がヒースロー空港に着きますと、契約しているオックスフォード市内のタクシーの運転手が私を含めて留学生を市内に連れて行ってくれるのです。このタクシー会社の運転手と話すのは非常に面白く、前回の運転手は老後のために、グランド・カナリー島に別荘を買ってあると言うのです。なぜ買ったのか聞いたら、「あそこは tax haven に近いから、あまり税金を取られないので、老後はそこで過ごす」と言うのです。自分の会社のディレクターは、フロリダに別荘を買っていると言うのです。地方都市の、人口が 14~15 万人くらいのところでも、お金があつたら世界に出て行ってしまい、モビリティが高いと思いました。エリートの人しか、昔はイギリスで海外に資産を持つことを考えなかったのですが、普通の人でも考えて、チャンスがあればうちの子もパブリックスクールに入れて、できれば、オックス・ブリッジを目指すという風になっております。

その原動力は何かと言うと、色々な意味で、イギリスは非常に豊かになったのです。私がこの仕事を始めた 70 年代は、冬のイギリスは寒くて仕様がありませんでした。暖房はせいぜい電気ストーブでした。90 年代に入ってから、イギリスの家庭の 90%以上はセントラルヒーティングに変わっております。スティーム暖房に変わっています。それくらい全体に経済が底上げされる中で、エリートとは何かと言うと、庶民の憧れは、圧倒的にレベルの高いオックス・ブリッジに出来がよければ入れたいと思っていることです。A レベルという国家認定試験を受けなければいけないのですが、今までは 2 科目か 3 科目で A を取っていれば、オックス・ブリッジに入れたと言われていましたが、今は 6 科目も A を取っても入れないくらい難しくなっています。私が経営している学校の校長は、イギリスのトップの女子高で長い間教鞭を執っておりまして、彼曰く、最近オックス・ブリッジに入りづらいので、ハーバードとか、エール大学に進学していると言うのです。そういう意味で、イギリスは大変な競争社会になっております。

その他に、この 10 年で、人種差別意識がなくなりました。ほとんどないと言ってもいいかと思います。お恥ずかしい話ですが、15 年くらい前にうちの教員で問題を起こす者がいて、首にしようと思ったのです。その男はたまたま黒人でした。うちの学校の顧問弁護士と相談したら、「これは大変だ。この男に訴えられたら、学校は人種差別をしたということを理由にして大変多額の賠償金を払うことになるので、首にはできない、しないほうがいい」というくらい、変わりました。イギリス社会は、より開かれて、どんどん来てください、ビジネスはどんどんやってください、それをゆるい網をかけて、イギリス人と言ってもいいでしょうみたいに変わっております。

その中で、オックスフォード、ケンブリッジの果たす役割はかなり変わったと思います。階級制の象徴ではない。学部教育を受けることはやはり素晴らしい。今、オックスフォード、ケンブリッジの授業料は 3,000 ポンドくらいです。今のレートで大体 40 万円くらいです。ところが、実際にはかかるのは、個人レッスンで先生が教えますから原価は 11,000 ポンドなのです。3,000 ポンドの授業料を取っているが、その 4 倍くらいお金がかかるの

です。それでもなぜ維持するかと言えば、伝統的に学部教育をしっかりしたものをやりたいということで、そのために財源確保に苦勞しています。開かれていますから、誰でもアプライできます。パブリックスクールの子が有利な面もありますが、片方では、今、労働党政権ですから、あまり落としてしまうと、国立大学でもありますから、優秀な子をなぜ落としたと、すぐにクレームが来ます。そのバランスの上で、かろうじて成り立っているのがオックスフォード大学なのかなと思います。社会全体で見て、昔のように中産階級、労働者階級があり、階級の対立があるというのは、ここ十数年の中で大分消えているように思っております。特に、オックスフォード大学だからエリートというのは、一部に残っておりますが、それ程強くは感じておりません。

伊東: 日本にはローズ奨学金のような奨学金がないのではないのでしょうか。実業界の人が、奨学金とか学校を支援する基金を出すという伝統がありません。そういう気風により成り立っている英米の大学は奨学金もそうです。外国から来る人が十分な奨学金を受けるということが日本にはないのです。ある奨学金を受ければ 24 時間勉強ができる、それが無いのは日本の大きな欠点です。

池野: 綿貫さんから指摘がありましたが、私と綿貫さんはタイムズが出している世界大学ランキングに係わっています。文科省が非常に熱心で、東大が去年 19 位くらいで、ベストテンに入れようと、文科省がしりを叩いているらしいです。私に言わせると、そんなことを議論する前に、ランキングを付けている人がどんな人かを見たほうがいいのではないかと思いました。2 年前にランキングを付けている会社の本社に行き、社長と会って大喧嘩をして帰ってまいりました。ビジネスでやっています。幽霊の正体見えたりみたいな感じでした。真に受けて文科省が「東大はベストテンに入れ」みたいなことをやっているのでは、外側だけ見て、事件の核心に入らない、やる前に、本質は何かを抉り出せばいいだけではないかと思っています。

嶋口: 非常に盛り上がって、これからあと 1 時間くらい議論したいところですが、最後に代表世話人の多島さんのほうからお願いいたします。

多島: 池野さん、大変にどうもありがとうございました。多面的に参考になり、多面的に刺激あるお話を頂戴しました。

お話の中に、また、皆様の議論の中に、エリートの議論がありましたが、私の理解するエリートの姿には、公のため民のために自己犠牲をあえてするために尊敬されるものと見えています。他方、日本が世界に普及できる文化として何があるかを議論していただきました。池野さんのお話の中に石門心学のお話でしたが、あの時代に商業道徳を徹底的に考えたのは、世界の民族には日本以外にはなかったのではないかと思います。その流れをもって、戦後の素晴らしい経営者の中に、自分の私心を捨てる無私であるとか、清貧思想というようなものが、相当に浸透していたように記憶しております。こういうのは、アメリカのバンカーの経営トップのもの凄い報酬というものに対する典型的な逆の姿であ

ります。これは世界に誇る一つのモデルではないかという気がします。このようなことを引き続き先々皆様と議論を重ねていければありがたいと思います。今日は本当にありがとうございました。

(寺園恵子記)

新 資 本 主 義 研 究 会

〒160-0004 東京都新宿区四谷4の6の1

四谷サンハイツ 202

電話 03 (3357) 6300

2009年5月22日発行

2009年5月29日改訂
